

変象する心性の観察

——清沢満之における『応用心理学』開講の意味——

樋口章信

一 問題の場

周知のように清沢満之は東京大学を明治二十年に卒業し、続いて同大学院で宗教哲学を研究した。同時に第一高等学校でフランス国史を講義し、井上円了を学祖とする哲学館において純正哲学、論理学、心理学を講じたこともよく知られている。明治二十二年に「哲学館講義録」として納められた清沢満之（当時は徳永姓）による講義は『純正哲学』そして『応用心理学』であった。その『応用心理学』の緒論には、心身関係、とりわけ精神のはたらきについての正確な理解がきわめて重要であるとの認識が表明されている。精神の本体論的側面の解明は、ロツツエによる『形而上学』を翻訳しつつ解明しようとした『純正哲学』において試みられ、その現象的側面の解明については、本稿で取り上げた『応用心理学』において、十九世紀後半における西欧の科学的成果を考慮しながら試みられたのであった。清沢満之の研究が諸側面から総合的になされなければならない時期に現在きている。その場合、初期における宗教哲学研究成果発表の嚆矢である「哲学館講義録」が暗示する意味と課題に触れざるを得ない。『純正哲学』については、不十分ながらさきにその考察を試みたことがある^①。ここでは心身関係の現象変化的側面を踏まえた上で、啓蒙期をほ

は終えつつあった明治中期以降も相変わらず日本人の心をとらえ続けた「迷妄信」の払拭を試みようとする『応用心理学』のもつ意義について考えてみたい。

今また二十世紀終末を迎え、かなりの数の日本人の心身内部を深く蝕みつつある迷妄なる心的状況が病理的側面をますます陰鬱なものに変容させつつある。生命に満ちた活動的精神が、事物認識における誤謬の間に覆われようとしてきた明治から平成の時代のなかで、清沢が課題とした人間における心性解明の試みは、我々に一条の希望の光を投げかけていると言えるのである。

二 井上円了が満之に委託した課題

西欧哲学思想を修めた上で日本民衆を仏教的精神によつて啓蒙しようとした、非僧非俗道人の号をもつ井上円了が、明治二十一年一月から十二月まで哲学館において『応用心理学』を講義しようとした。しかし「生儀病氣にて代講を徳永氏に請う」という理由で井上が清沢に講義の代理を委託したことはあまり知られていない。^②

井上は世の中の迷信現象を一扫しようと、哲学館において明治二十六年十一月から一年間『妖怪学講義』をおこなった。またその『講義』を基盤に据え、明治三十三年四月から翌年三月まで、一般の人々によく読まれるように月二回の分冊にして、この本を雑誌として出版した。これが世に『妖怪学雑誌』と呼ばれたものである。井上は清沢と同様、象牙の塔にこもるような種類の学者ではなく、宗教性と合理性がそれぞれの位置を混乱させない形で民心が開放されるよう願う文化刷新的人物であった。国の行方をリードしていくべき人々の基盤となる民衆の心が、「道理に暗く、運命に迷」い、妖怪や怪奇現象に惑っている当時の状況を放置してはおけなかった。そのような迷妄信の除去こそまず取り組まれるべき仕事であったのである。『迷信と宗教』のなかで彼は次のように語っている。

すでに迷信を有害と断定したる以上は、これを除去する方法を講じなければならぬ。またその方法を講ずるに

はまず迷信の起こる原因を知ることが肝要である。迷信の種類に多様あるが如く、その原因にも多様あつて、精細の説明は一朝一夕になし難いから、ただここには大体について主要なる原因だけを挙示したいと思う。もしこれを一括して言わば、

(一) 道理に暗きより生ず。(二) 運命に迷うより生ず。

この二項目に帰するであらう。^③

この後で井上は、道理に暗いのは知識が乏しいからで、また知識が乏しいのは教育が足らないからである。そして運命に迷うのは信仰の程度が低く、意志が弱いことに原因があると言う。そして意志を強くし、信仰を進めるのは「宗教の受時」によってこそであると断ずる。日本には教育も宗教もおこなわれているのに、まだ迷信が横行しているのは、教育と宗教に不十分の点があるからであると言う。学校が教育の場であることは間違いないが、第一に家庭がしっかりと迷信打破の教育をおこなわなければならぬ。その上で社会教育的改良を加えていかなければならない。宗教界においても「宗教家の仕事はほとんど葬式法事に限られているようなありさまで、たまたま説法をして聞かしても、冥福を祈らせるか、現福を願わせるようにのみ導いて、宗教がかえって迷信を増長させる手伝いをするありさまである^④」と、その指摘は手厳しい。

また井上は経験について考察する部分で、三点を挙げ、(一) 経験に乏しいために迷信に陥る、(二) 論理に暗いために迷信を起こす、(三) 学理に通ぜざるために迷信を作る、と説明している。^⑤ 日本自身の長い伝統を抱えながら吸収された欧米の文明的精神はすべて日本にとって良質のものであるべきはずのものであった。しかし彼にとって西欧精神は雑多なものを含んでいた。明治啓蒙期に活動した仏教思想家らしく、主著『真理金針』において主張されたように、彼は西欧文化の中心の一つであるキリスト教のもつ迷信的部分は批判しながらも、カントなどを主とする西欧の哲学的理性性や道徳性の積極的側面は十分に活用し、日本各地に赴いて演説や講演等の手段を駆使しながら、日

本民衆の心根を本来あるべき姿に導こうとしたのである。^⑥

この姿勢は、その実践が満之において委託されたものでもあり、同時に満之自身が自ら願った方向でもあった。東本願寺派遣の日本近代初期における東京大学留学生という共通点をもつ彼らは、国民の多くが信に迷いつつあるという精神状況が惹起する問題に意欲的に取り組もうとした。今川覺神と稲葉昌丸は「清沢君の事ども」として次のように語っている。

十八年春東京留学生はみな東京大学もしくは大学予備門に集まり居たるをもつて、将来の方針につき協議する所あり。今後各自の研究すべき学科の分担を次の如く定め、他日学団を組織し、学園を経営せんことを期す。井上は主としてヘーゲル哲学を研究し、徳永は主としてカント哲学を研究し、兄柳は国語及び哲学を、弟柳は歴史及び国文学を修むること。今川は数学・物理学を修めて後日俱舎論の方面を研究する資料とすること。稲葉は動物学を修めて進化論を研究すること。この協議の結果は書面をもつて本山へ上申せり。^⑦

井上は先輩留学生で、東京での彼らの保証人でもあり、このグループのリーダー的存在であったと考えられ、この意見も井上円了の指導の下に考えられたであろう。日本国家の文化的有事としての対キリスト教対策を大いに意識していたことは当然のことであるが、彼らはともに国際的文化往來の窓口である東京において、欧米の科学や進歩史観を含む世界のあらゆる精神文化的状況に注意を怠らずに、日本人の心性の眞の啓蒙を考えていたのである。

三 『応用心理学』講義の実際

(一) 『応用心理学』の構成

この講義は未完のものであり、そのことについて清沢は『講義』末尾に次のように付言している。

哲学館において実際の講義は情意の変象を論じ、次いで無識神経作用・夢・夜行・催眠・降神術（あるいは靈論）魔術等の諸説を述べたれども、去る七月当地尋常中学校へ赴任したる為、爾来事務繁劇講義の原稿を製するの余暇を得ず。終に講義録終結の時期に迫り、今回の原稿を以て講義を完結せざるを得ざるの始末となり、精神変象の全体を讀者諸君に講明するを得ず。自ら顧みて遺憾に堪えず。よつて一言以て諸君に陳謝す。^④

『応用心理学』を講義している途中に満之が京都の尋常中学校に赴任したということは意味深い。伏魔殿とも呼ばれた当時の京都の宗教界へ身を移した、ちょうどその時期がこの講義の真つ最中であつた。それが単なる偶然なのか、それともそこに何らかの必然性があるのかどうかは分からないが、世の迷妄の心性を払拭しようとした『応用心理学』講義の課題と京都における新たな大谷派宗門人としての人生展開との関連がまつたくないとも言えないのである。縁があつた大谷派宗門の、特に教育的場面における精神的開放と非迷妄的信の確立のために、伝統的文化の都市京都において、東京における哲学館よりもさらに徹底した人間教育の場が深く意識されたことは十分可能であると言つてよいであらう。

さて『講義』の構成は次のようになっている。

緒論↓本論（第一章・心身相関、第二章・神経系統、第三章・精神作用、第四章・精神の変象（端緒・注意作用、第一節・感覺変象（一・視覚、二・聴覚、三・触覚、四・臭覚、五・味覚、六・有機感覺））・第二節・知覚変象、第三節・思想変象

上からわかるように、本論第三節「思想変象」で講義は終了しており、講説途中であつたことが分かる。清沢は本論の第一章において「心身相関」を考察し、その冒頭の部分で次のように言明している。

およそ精神の作用を弁ずるにはまず心身の關係を論ぜざるべからず。しかれども、その理論にいたりてはこれを哲学にゆずり、いま心理学上においては、ただちに常識にうったえ、現象について概論すべし。精神作用は身体

の模様にしたがって変化すること疑いを容れず。(中略)ゆえに心理学を研究するにあたりては、神経系の構造作用を知ることをもって必要なり。これにくわうるに、今日心理学のいちじるしく進歩したるは、解剖生理学特に神経系統の研究もつとも発達せしによるものといわざるべからず。

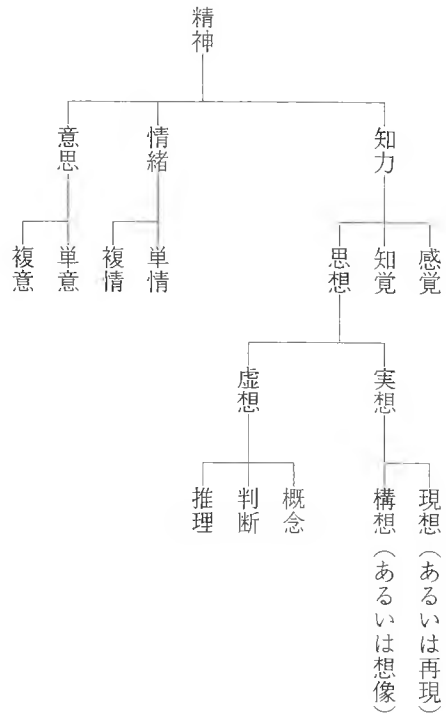
このように述べた後で清沢は、当時の神経系統と精神現象にかんする解剖生理学の情報を図示・詳説する。問題は第四章の「精神的変象」、なかんづく後述するところの第一節「感覺変象」、第二節「知覚変象」ならびに第三節の「思想変象」にあると思われる。変象とは聞き慣れない言葉であるが、変化する現象、あるいは現象の変化の謂である。また「思想」という清沢の用語法は注意が必要である。これはイデオロギー的思想を意味するのではなく、思考作用と想像作用の二つの知的側面を指している言葉である。本論攷では、清沢の「思想」を思想・想像あるいは思想と言ひ換えている。

(二) 精神活動

清沢は『応用心理学』第三章「精神作用」の冒頭において、「精神作用はその種類多端なりといえども、大抵これを彙類し、知力・情緒・意志の三大門となし、さらにこれを細別し、感覺・知覚・思想・単情・複情・単意・複意等となす」と説明した上で、次のように図示している。

このように図示された分類にしたがって精神作用が説明されるが、顕在化した精神的変象であるところの「注意作用」を前提しなければ諸種の精神作用が機能しないことが強調される。それは「一事物あるいは一顕象の上に、精神力を集向專注する作用である」と定義されている。その注意作用は三昧(samachi)的性格をもったものであり、思想的現象発起の端緒なのである。

この図示において非常に興味深いことがいくつか見いだされる。一つは感覺と知覚が知力のなかに分類されている



ことである。これは仏智が直観的性格を有していることと無関係ではない。またもう一つは思・想が「実想」と「虚想」に分類され、前者に再現力としての「現想」と想像力としての「構想」が分類されていることである。これは一般心理学的解釈の枠を超えた、新たな人間心理の把握方法である。概念・判断・推理が虚想に分類されているのもそこから理解できよう。一般的には概念・判断・推理こそが実想であり、表象 (representation) や想像 (imagination) などは虚想のはたらきであると考えられるであろう。しかしここではそれとは反対の考え方がなされている。我々の生活の実相からするならばこれはかなり正確な認識であると言えよう。この場において現に顕在化している精神現象を事「実」と捉えるリアルな感覚が清沢にあつたと思われる。

(二) 思考・想像が感覚に及ぼす影響(感覚変象)

感覚についての議論であるが、この章の第一節では視覚・聴覚・触覚・臭覚・味覚・有機感覚(意識統覚のこと)の六種類の感覚についてその変象が解説されている。まず「感覚には変象なきものといわざるをえないこと、またそれは「知覚を構成する材料」であり、そして「雑多の材料を取りてこれに分別を加えるもの」であることが述べられている^⑫。視・聴覚の二感覚については、空気や水などの「中間物」の介在によって、現象的变化が起こりうることを指摘する。我々が見たり聞いたりするものが中間媒体によってゆがめられてしまうことがあると言っているのである。また「相対物」の介在によっても変象する。「異時相対」とは、「ある色を見たる後に他の色を見る時は、前色の感覚遺存して後色の感覚を変」えさせるような場合を言い、「同時相対」とは同一時に視・聴覚において起こるトリックである。視覚で言えば、平行線に複数の斜線を介在させるとその平行線の幅が場所により異なって見える場合などが例に挙げられている。

また清沢は通常異なった精神・思想・情緒などより生ずる視覚変象は大抵幻想(Hallucination)であると言う。それは「生ずべき形体物の刺激なくして諸種の精神作用時に外覚作用を起こすものにて、物象なきに物象を見、音声なきに音声を聞く等の現象」である。とりわけここで視覚変象を精神や思・想という関連で論じたのは、視覚が幻想発生の「外事情^⑬」としてあたえる影響の大きさを考慮したからであろう。尚、視覚変象を生じさせる「内事情」には身体及び神経系と精神作用が指摘されている。

感覚の下にて指説したる変象も、精密に之を論ずれば知覚に属するものと云うべし。(中略)(何となれば感覚は一個の精神作用にして、多数あるいは重畳の刺激あるに当たりて、その総結果として顕わるるものなればなり。)^⑭清沢における感覚の概念についての要点は、それが有機意識(統覚的意識)を含むのみならず、知覚や思・想と同レベルで機能する、知力に含まれるところの作用であるということであろう。感覚にはたんなる受容的・受動的側面だ

けでなく、変質させる中間媒体が介在するという洞察は、それが知の虚妄性の可能性を暗示することから大きな意味をもつてくる。またその感覚、特に視覚、聴覚、有機感覚に、恐怖や畏れなどの思考・判断・感情が影響を及ぼすということが明らかにされているということも特筆に値する。しかし総括的に言えば、感覚は「未だ自他内外の分別を加えざる分位」であつた。

(四) 思考・想像が知覚に及ぼす影響（知覚変象・解得作用・専制思想・専制感情）

いま「自他内外の分別を加えざる分位を取りて感覚変象となし、また「その自他内外の分別を加えたる分位はこれを知覚変象に撰すべ」きであると言われた¹⁵。感覚的認知にたいして分別（意志的選択）・判断を下した境位、これが知覚変象である。知覚変象は迷信を発生させる原因となりうる。その要点は分別・判断としての「解得作用（了解し、会得したと思ひこむ作用）」にある。清沢の例証は次のようなものである。

高等精神作用の影響は感覚そのものを変化すること甚だ多し。円形と黄色との感覚は必ずしも橙を構成するに至らず、楕円形と青銀色との感覚は必ずしも瓜を構成するに至らず。之を橙なり、瓜なりと知覚するは、現実の感覚について解得作用を施すものなり。故に知覚の要点は感覚を解得する作用にありと云うも決して不可あることなし。しかしして解得作用は経験に基づき、判断を行うものに過ぎず。諸種の判断は之を行う時の精神の状態によりて甚だしく変異するものなるをもって、吾人の外物を知覚するは専制思想、（ドミナント・アイデア）、あるいは専制感情（ドミナント・フィーリング）のために非常の変象を生ずること、その理甚だ瞭然たり¹⁶。

ここで清沢は、高等精神作用、すなわち人間の解得作用のために、感覚そのものを変化させる場合が多いことを指摘している。青い色の楕円形が必ずしも瓜を想像させるとは限らないが、実際そのようにそれを知覚する人がいるのは、現実に受容した感覚について解釈し、理解したと思ひこむことによるのである。知覚変象は「社会の迷信を惹起する

要素」である。また社会全体が恐怖や畏怖を感じ、それが社会の下部意識的な想念の領域に組み込まれ、そして知覚され、最終的にその全体的思想に展開してくるということが指摘されているのである。専制思想という言葉にはカタカナのルビまで付して注意を向ける。この専制思想は予期意向と形容されるように、あらかじめ期待する意識の方向性を有している。「しかしてその誤解たるや単に一人にとどまらず、数人同時に同一の有り様を呈することあるがゆえに、世上に靈怪出現等の事例あることを説くがごときは、応々しかるべきことにして怪しむるに足らざるなり。」¹⁷と第三節を結んでいることから、「数人同時同一の有り様を呈する」程に、つまり共同体的・社会的な枠組みにおいて大きな錯誤を犯しうるものとして示されているのである。

これらの事例は決してその類に乏しからず。これを要するに亡霊の出現することあるべきを確信せる人にしてその精神の状態これに契合する時にありては、予期意向専制思想のために感覚を誤解するにいたること決して少々にあらざるべし。¹⁸

予期された形で意志が向けられた専制的、支配的精神状態や支配的思・想によつて、感覚が誤謬を犯し、個のレベルでも集団のレベルにおいても認識錯誤の生ずることがここに明確に述べられている。

予期意向専制思想の原因は恐怖感情ならびに畏懼感情である。上述のように、「知覚の不正」あるいは「知覚の錯誤」とは、実物が無いのにあたかも実物があるかのごとく感じたり、また一物しかそこに存在しないのに同じ物が複数同時に存在するかに感ずる錯誤を犯した知覚であった。実物や実形を認知するこのような作用は精神作用に重大な影響をあたえることがあると清沢は言う。では精神や思想に影響を及ぼす直接的原因は何であるのか。端的に言うとそのそれは、何かを意識下、無意識下において恐れる「恐怖感情」、あるいは何かを意識下、無意識下において畏れる「畏懼感情」であると言う。つまり、

恐怖・畏懼感情↓思・想への影響↓その思・想の知覚への影響↓その知覚の思・想への影響

という順序において我々の認識錯誤が発生するのである。このプロセスを筆者なりに整理して言い換えてみると、（個人の無意識内部における恐怖・畏怖の感情↓それを認知した意識底辺部における思考・判断・想像↓表層意識における高次の思考・判断・想像↓身体的反応・社会的行動）となる。

「高等精神作用の影響によりて生ずる知覚変象は、怪談の大部を構成する材料にして、社会の迷信を惹起する要素たり。」と清沢は明言する。どのような確信も、その確信自体の根底が本人の気づかぬままに、恐怖的・畏懼的感情に支配されることによつて、さきに述べた専制性、すなわち「予期意向専制思想」と清沢が言うプロセスをとおして、感覚における間違つた認知が犯される。このような無意識的恐怖感情の侵入についての清沢の考察と指摘は、明治中期の科学的成果に負つており、素朴な側面もあるのであるが、その内容において現代の精神分析学にも通ずる世界をもっている。清沢のこの言述は、仏教が言い当てた心の妄念・妄想的在り方を、明治中期における科学的言葉を用いて綴っているものである。尚、恐怖的・畏懼的感情に支配された「予期意向専制思想」によつて感覚が錯誤を犯してしまうケースは、単独の人においてだけでなく、数人同時に、あるいは極端な場合、社会全体においてありうるということも重要な一点であろう。「社会の迷信」ほど一旦動き出すとやっかいな存在はない。人心が付和雷同現象を起し、自己と社会にたいする冷静な洞察が一扫され、フアナティックな、あるいは冷徹に邪計する一部指導者の下で、民衆が破滅に導かれた過去の、あるいは現在進行中のさまざまな事実がそれを如実に物語っている。

(五) 思考・想像の他作用に及ぼす影響（思想変象）

思考・想像が身体、あるいは身体的機能に及ぼす具体的影響については、「想動作用」というものが清沢において考えられた。これは生理的には大脳の反射作用であるが、人間における感情や思いこみがあまりに強力・強烈である場合、筋肉などの身体的部分、あるいは全体に相当の影響が及ぶという事態になる。それは視覚界、聴覚界を中心に

意識界に及ぶ。ここでは意識も身体の機能のひとつと考えられる。この場合、意志的制止作用はかなり減少するか、あるいはほぼ静止的状态に及ぶとされる。この状態にあるのは、例えば夢遊病 (somnambulism) の場合である。これを清沢は「夜行」と形容している。また催眠状態 (hypnotism) も代表的想動作用である。両者とも、思想が人間の意としての身体に大きく作用した例と言える。

言語活動にたいしてもこの作用は影響を及ぼす。筆記行為や発話行為を惹起させるほどにこの思いや想念は力をもつのである。自立的・自主的意志がこのような場合には極力減少しており、主体も意識内で存在しているつもりになっているので矯正がきかない。また再々文脈をはずれ、前後顛倒した語句の配列が見られるというのも言語活動における想動作用の特徴であるとされる。

二 結 語

『応用心理学』第四章第三節冒頭において、「思想」が「その区域広漠にして実想虚想の二大部に分」かれ、それがまた「理想・構想」として分類されることが述べられ、総じて「諸般の思想はみな精神内のもの」であることが指摘されていた。それだけでなく「想動作用」にまで及ぶ「予期意向専制」という思考・想像の影響についても語られた。明治期全般に流行した、いわゆる怪談・妖怪を初めとする迷信・邪心の類は、恐怖感情に支配されて生ずるものであった。これは事物認識における誤謬の闇を生じさせる原因であった。迷信の底にあるものに清沢が畏懼感情を含めたことも注意すべきことである。この情は恐怖の感情とは文脈が異なる。何故清沢が畏懼感情を含めたのか。畏懼とは敬意をもってかしくまった心であるが、よく観察してみると高度な精神作用、例えば特定の思考・判断・選択などの裏返しでもある。独立的主体性を喪失したこの両感情は、集団レベルで作用すると取り返しのつかない禍根を残す災いをもたらすものなのである。

清沢は育英教校ですでに親鸞の基本的思想と論理についての学びを終えており、本来的信心の非迷信性は早くから意識されていたと思われる。親鸞の名はこの講義録には出現しないが、清沢の明晰な科学的認識の力もさることながら、自力分別の迷妄を破ろうと、清沢とその時代をとおして動く如実・真実の働きがこの『応用心理学』の背景にあると私には感じられる。欧米から移入された当時の心理学は哲学の一分野であり、まだ独立した学問領域となっていないわけではない。人間心理の解明も哲学者の仕事であった。啓蒙的仏教者井上田了畢生の課題を引き受けた満之は、明治期最新の知を援用しながら、さりげなく我々の錯誤的心性の変象と迷妄的信の在り方に警鐘を打ち鳴らそうとしたのである。清沢における『応用心理学』は、真理性としての信心に裏打ちされた主体の自発的表現であったと言いうべきであろう。

- ① 『大谷大学研究年報』第五十集所収拙論「R・H・Loizeと清沢満之」。
- ② 国書刊行会発行『妖怪学雑誌』の付録、板倉聖宣著『妖怪学雑誌の総目次と井上田了の著書目録（一九八四年）』参照。
- ③ 井上田了・『迷信と宗教（国書刊行会、昭和六一年）』一七〇～一七二頁。初版は修文社より昭和五年発行。
- ④ 同、一七二頁。
- ⑤ 同、一七三頁。
- ⑥ 「明治一三年に一念發起し、大正八年までの三十年間に全国をくまなく行脚し、啓蒙運動を続けた。その講演記録は『南船北馬集』と題した十五冊に及ぶもので、大正六年（一九一七）までの記録では、実に七一〇〇回を越える講演会を開き、聴衆は延べ二八五万人から三五七万人に及んだと推定される。」という唐沢富太郎氏の解説がある（昭和五九年・ぎょうせい発行・『図説教育人物事典』、下巻、六九二頁）。
- ⑦ 西村見暁編『清沢満之全集（法蔵館、昭和三二年）』第一巻、五八八頁。以下『全集』とする。尚、引用文は読みやすいように旧漢字を新漢字にしたり、また漢字をひらがなにしたり、あるいは送りがなを振り足した部分がある。
- ⑧ 『全集』、一五三頁。
- ⑨ 同、七一～七三頁。

- ⑩ 同、一〇一頁。
- ⑪ 同、一〇三頁。
- ⑫ 同、一二五頁。
- ⑬ 清沢は根拠、あるいは理由を意味するドイツ語の *Gründe* に「事情」という訳語を付している。これは「ものがら」でなく「ことがら」の連鎖のなかで現象が展開することを暗示する適切な翻訳であろう。
- ⑭ 『全集』一二五頁。
- ⑮ 同、一二六頁。
- ⑯ 同上。
- ⑰ 同、一三一頁。
- ⑱ 同、一三三頁。
- ⑲ 同上。
- ⑳ 同、一三〇頁。
- ㉑ 清沢は哲学館において、降神術や霊、魔術などについての説明をこの想動作用を用いておこなったと思われるが、「付言」を見て分かるように、『応用心理学』ではそれらについての個別の考察は載せられていない。